

2014
11/22

学習支援付き保養プログラム

つばさ 2014 冬

11/24
TOKYO

活動報告書

2014 年冬 つばさ報告



受験勉強付き保養プログラムを実施した2012年の夏休みに、福島県から24名の中学3年生が海を渡って北海道にやってきました。ほとんどの参加者がお互いに初めての出会いでしたが、3週間一緒に生活する中で、不思議な解放感と共に協調と信頼の関係が育まれていきました。わたしたちはその関係を特別な思いを込めて「つばさ」と名付けました。

2012年つばさ1期生、2013年つばさ2期生が誕生していく中で、受験勉強も大事ですが、もっともっと生きていく上で大切なことを学び合えるような過ごし方ができないかともみをすますプロジェクトは考えるようになりました。

海洋生物学者のレイチェル・カーソンは、1962年に「沈黙の春」で環境汚染と破壊の実態を先駆的に告発しましたが、彼女はこの本を執筆中に癌におかれ、そして人生の最後の仕事として「センス・オブ・ワンダー」を残しました。

その素晴らしい本から引用します。

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。

もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない

「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。

この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです。

今回、高校2年生になったつばさ1期生と共に第4回市民科学者国際会議に参加したり、北川先生、早尾先生、小野先生と語り合う中から、新つばさが目指す道をみんなで探してみたいと思います。

新つばさに向けて The Sense of Wonder

NPO 法人みみをすますプロジェクト
代表 みかみめぐる
「2014冬つばさ」しおりより

学習支援付き保養プログラム「つばさ 2014 冬」

実施報告



現状と課題：

震災・原発事故後4年目となる時期、福島県内及び避難先に在住する子ども達は、将来への不安や放射線への恐怖を持ち続けながらも、その不安を口に出来ないまま普通に生活し、心身の抑圧状態を招いていました。

とりわけ福島県在住の子ども達の中でも受験を控えた中学生や高校生は、心身のリフレッシュにつながる「保養」の機会もなかなか得られず、不安の膨らむ状況下にありました。

「2014年冬つばさ」の動機：

私たちみみをすますプロジェクトのメンバーは、2012年に一般公募により、福島県内各地から24名の中学3年生を学習支援付き保養プログラム「つばさ」で北海道に招きました。現在高校生になっているつばさメンバーを継続的に励まし続ける活動の中から、心身の抑圧状態に陥っている様子を知ることとなります。



対応：

私たちの現状の力量と、これまで培ってきた支援の輪を生かし、小規模ながらも、舞台を東京に移し、今出来る事を行動に移すこととしました。

今回、福島第一原発事故発生から一年に一度開催されている「市民科学者国際会議」に参加し、自分達がどんな状況に置かれているのかを客観的に知る機会を持つ。それと同時にオリジナルプログラムとして、将来に向けて逞しく自分の道を切り開いていく意義を、三人の先生達からレクチャーを受ける。合わせて特別な出会いと友情を育んできたつばさメンバー同士の再会プログラムと位置づけて実施することとしました。



活動成果

1.

高校2年生7名が参加し、市民科学者国際会議の場で福島県の高校生として代表1名がスピーチの機会を得ました。

大人だけの議論の場になりがちな国際会議に10代の若者達が参加して自分の体験とそれによって生まれた考えをスピーチした意義は大きく、多くの方達からの賛辞を受け、参加生は皆晴れやかな顔をしていました。

2.

大人達があんなに真剣に議論しあっている様子に驚いたが、今回国際会議というものに参加できて、自分達が置かれている状況を今までよりも理解することができたし、一方的に情報に左右されるのではなく、自分自身で考える事が大切だと気が付いたと語る子が複数いました。

3.

オリジナルプログラムでは、医師（小児科・児童精神科）と大学の先生から「自分がどういう生き方をしてきたのか」といった自分史を中心としたレクチャーを受けました。

とても身近で判りやすいお話しに多くの参加生が感銘を受ける中、農業高校に在籍しているM君は、卒業後に大好きな北海道で農業研修をすることを決めました。

工業高校機械科に在籍しているT君は、進学を諦めかけていたが、自分の好きなことを続けていくために大学進学に挑戦したくなったと語ってしました。

原発事故という災難に自らの生き方が振り回される状況下にある彼らですが、それを力に変えていく一助になったのではないかと考えています。

4.

原発事故という経験の中で保養プログラムに参加して出会ったつばさの仲間達は2年ぶりの再会でしたが、今回の再会を通して生涯励まし合える友達だと改めて感じる事が出来たようです。

孤立させず、手をつなげ助け合う関係を作れたと考えています。



「つばさ 2014 冬」の3日間



11月22日(土)

1日目

1. 福島組
12:30 福島駅新幹線「西口」改札前
2. 郡山組
13:00 郡山駅新幹線「中央口」改札前
16:00 東京麻布台セミナーハウス 到着
16:30 ~ オリエンテーション
北川先生の講話
「セルフメンタルケアについて」
早尾先生の講話
「わたしの歩んでいる道」
19:00 ~ つばさ交流会



11月23日(日)

2日目

- 9:30 国立オリンピック記念
青少年総合センター／国際交流棟
第4回市民科学者国際会議 参加
- 13:00 ~ つばさオリジナルプログラム
小野有五先生と語り合う
「わたしたちの地球未来」



11月24日(月)
3日目

- 9:30 ~ 市民科学者国際会議(円卓会議)参加
横田くんスピーチ
- 13:00 ~ 市民科学者国際会議参加
- 14:30 ~ ふりかえりミーティング





第4回市民科学者国際会議スピーチ原稿

つばさ高校生7名を代表して 横田 優 ヨコタスグル (17歳)

本当なら
今頃僕は福島県郡山市のどこかの
高校で高校二年生として
その学校生活を
謳歌していたのだと思います。

しかし北海道札幌市で僕は今、
高校の寮に入って
高校一年生として学校生活を送っています。

中学卒業後に親元を離れ、
一年の高校浪人生活を
札幌で独り過ごしました。

それもすべて、
2011年3月。。。
福島原発事故が起きたからです。
この事故はまさに僕の人生を180度変えた、
抗いようのない出来事でした。

住み慣れた街・共に学んだ友達・家族と離れること
を決めるには当然葛藤もありました。

その葛藤を払拭したのは
二つの経験でした。

一つ目は保養への参加です。
2011年の夏休みに初めて
北海道への保養プログラムに参加し、
2012年には
学習支援付き保養プログラム《つばさ》に
参加しました。

特に2011年の夏休みは
原発事故後から夏休みまでの
非日常的な毎日、被曝からの回避という
放射能と闘う生活から
正常な事故以前の当たり前の生活を送れた事への
感動と
その《当たり前》への強い憧れが芽生えました。

二つ目は震災直前の事ですが、
中学一年生の時、
一年間を通しての総合学習の際、
偶然、原子力発電について調べ、
原発安全神話とともに、その神話の脆さ、
原発の持つ危険性についても
調べていたことが
避難移住への大きな要因となりました。

そんな
事故後の放射能による被曝を気にする人生のスタートから3年。
新天地での生活から1年半。

外から見た福島の実状は
非人道的だと感じています。

事故当時から思い続けていますが
3年過ぎた今も、当時と変わらず、
むしろ時間が経過すればするほど強く
それを感じています。

放射能を気にしながら闘いながら生活をする福島。
そんな環境では、
心身ともに健全な状態は保てないと
僕は思っています。
これは僕だけの問題ではなく、
福島だけの問題でもないと思います。
この国の、
この星の問題なのではないでしょうか。

あの時から止むことなく現在完了進行形で
起こっている福島のこの事態を
どうしていくのか。。。
そんな福島から
どんな光を見つけていくのか。。。。

僕たちの将来をどうしていくのか。
事故後、この過ちを繰り返さないためには
どうする必要があるのか。

それを考え、また行動すべきは
この事態を身をもって体験し経験した
福島の僕たちに課せられた、
課せられてしまった大きな責任なのだと思います。

僕は、避難移住という選択をしました。

しかし、つばさのみんなも含め共に学んだ友達や家族…
今も福島に残り、
各々が放射能と闘い続けています。

北海道と福島。
違う選択にはなりましたが、
《当たり前》のある生活を福島にまた
届けるために、
僕たち世代が、この問題と真摯に向き合い、
また、
二度とこのような事が起こらないためにも、
語り部の一人として。
福島の未来を切り開く歯車として。
一人一人、出来ることは何なのかを考え
行動していきたいと思います。
また
放射能に対し/そして低線量被曝による健康被害などを
多くの人たちが間違いのない正しい知識をしっかりと
身につけて欲しいと思います。

今日は「つばさ」のメンバーと一緒に参加し僕たちの
経験したことや思っていることを市民科学者の皆さんに
話す機会に感謝します。
本当なら
今頃僕は福島県郡山市のどこかの
高校で高校二年生として
その学校生活を
謳歌していたのだと思います。

しかし北海道札幌市で僕は今、
高校の寮に入って
高校一年生として学校生活を送っています。

中学卒業後に親元を離れ、
一年の高校浪人生活を
札幌で独り過ごしました。

それもすべて、
2011年3月。。。
福島原発事故が起きたからです。
この事故はまさに僕の人生を180度変えた、
抗いようのない出来事でした。

住み慣れた街・共に学んだ友達・家族と離れること
を決めるには当然葛藤もありました。

その葛藤を払拭したのは
二つの経験でした。

一つ目は保養への参加です。
2011年の夏休みに初めて
北海道への保養プログラムに参加し、
2012年には
学習支援付き保養プログラム《つばさ》に
参加しました。

特に2011年の夏休みは
原発事故後から夏休みまでの
非日常的な毎日、被曝からの回避という
放射能と闘う生活から

正常な事故以前の当たり前の生活を送れた事への
感動と
その《当たり前》への強い憧れが芽生えました。

二つ目は震災直前の事ですが、
中学一年生の時、
一年間を通しての総合学習の際、
偶然、原子力発電について調べ、
原発安全神話とともに、その神話の脆さ、
原発の持つ危険性についても
調べていたことが
避難移住への大きな要因となりました。

そんな
事故後の放射能による被曝を気にする人生のスタートから3年。
新天地での生活から1年半。

外から見た福島の実状は
非人道的だと感じています。

事故当時から思い続けていますが
3年過ぎた今も、当時と変わらず、
むしろ時間が経過すればするほど強く
それを感じています。

放射能を気にしながら闘いながら生活をする福島。
そんな環境では、
心身ともに健全な状態は保てないと
僕は思っています。
これは僕だけの問題ではなく、
福島だけの問題でもないと思います。
この国の、
この星の問題なのではないでしょうか。

あの時から止むことなく現在完了進行形で
起こっている福島のこの事態を
どうしていくのか。。。
そんな福島から
どんな光を見つけていくのか。。。。

僕たちの将来をどうしていくのか。
事故後、この過ちを繰り返さないためには
どうする必要があるのか。

それを考え、また行動すべきは
この事態を身をもって体験し経験した
福島の僕たちに課せられた、
課せられてしまった大きな責任なのだと思います。

僕は、避難移住という選択をしました。

しかし、
つばさのみんなも含め共に学んだ友達や家族…
今も福島に残り、
各々が放射能と闘い続けています。

北海道と福島。
違う選択にはなりましたが、
《当たり前》のある生活を福島にまた
届けるために、
僕たち世代が、この問題と真摯に向き合い、
また、
二度とこのような事が起こらないためにも、
語り部の一人として。
福島の未来を切り開く歯車として。
一人一人、出来ることは何なのかを考え
行動していきたいと思います。
また
放射能に対し/そして低線量被曝による健康被害などを
多くの人たちが間違いのない正しい知識をしっかりと
身につけて欲しいと思います。

今日は「つばさ」のメンバーと一緒に参加し僕たちの
経験したことや思っていることを市民科学者の皆さんに
話す機会に感謝します。



A speech by Suguru Yokota, representing 7 high school students from a temporary retreat program with academic assistance, “Tsubasa, Winter 2014.”

Suguru Yokota (age 17)

Translated by Yuri Hiranuma

Under the normal circumstances, I suppose I would have entered the second year at some high school in Koriyama City, Fukushima Prefecture, by now, living a full and enjoyable high school life.

However, I am in Sapporo City, Hokkaido now. I live in a dormitory, leading a school life in the first year of high school.

After graduating from a junior high school, I left my parents, my family, and my nest at home.

I spent a year, all by myself in Sapporo City, studying for a high school entrance examination.

This is all because of what happened in March 2011—the Fukushima nuclear power plant accident.

This accident was an event that literally turned my life around 180 degrees with an overwhelming force.

Naturally, there was a struggle in deciding to leave everything behind—my hometown, my school friends, and my family.

Then, two experiences resolved the struggle.

First was participation in the temporary retreat.

During my summer break in 2011, I participated in my first temporary retreat program in Hokkaido.

In 2012, I participated in the temporary retreat program with academic assistance called “Tsubasa.”

(Note: “Tsubasa” means a “wing.”)

In particular, my experience during the 2011 summer break brought back an ordinary pre-accident life.

After spending extraordinary days since the accident up to the summer break, fighting off radiation and trying to avoid radiation exposure, being able to experience a normal and ordinary life again was deeply touching. A strong yearning for “the ordinary” began to grow within me.

The second experience happened immediately before the Fukushima disaster struck. In the first year of junior high school, I happened to research about nuclear power generation throughout a whole year of general study. I gained knowledge about the Safety Myth of nuclear power plants, learning how fragile the myth was and how dangerous nuclear power plants were. This knowledge was a major contributing factor in deciding to evacuate and relocate.

Three years have passed since the start of my new life, worrying about radiation exposure from the radioactivity released from the accident.

One and a half years have passed since the beginning of my new life in a new world.

Current situations in Fukushima appear inhumane when seen from the outside.

In fact, I have been feeling this inhumaneness ever since the accident. Three years later, I am still feeling it just as strongly as back then, and the feeling grows even stronger as time passes.

Living a life in Fukushima, worrying about radiation and fighting it off.

It is my feeling that one cannot maintain physical and mental health in such a circumstance. It is not just my own issue, nor is it just an issue for Fukushima Prefecture. It is an issue of this country, or rather, this planet.

What can we do about this situation in Fukushima, ongoing in a present perfect progressive manner…?

What sort of light can we seek out of this Fukushima…?

How are we going to live our future? What can we do so this mistake will not be repeated after the accident?

In my opinion, to think about it and act on it was a huge responsibility that was imposed, without choice, on those of us in Fukushima who physically experienced the accident and its aftermath firsthand.

I chose to evacuate and move away.

However, my school friends, including the fellow “Tsubasa” members, and my family still remain in Fukushima. All of them individually continuing to fight radiation.

Hokkaido and Fukushima.

My choice was different from my friends. However, my generation will have to face this issue with sincerity, so that “ordinary” life can once again be delivered to Fukushima. I would like to bring actions, as one of the people that keep talking for posterity so that this would never happen again.

To act as a cog in the wheel clearing the path for Fukushima’s future, thinking about what each of us can do.

Also, I hope many people will acquire correct knowledge about radiation and health effects from low-dose radiation exposure.

I thank you today for the opportunity to participate in this symposium with my fellow “Tsubasa” members to talk about our experiences and our thoughts to all the citizen scientists who are here.

特別プログラム 11月23日午後1時～4時

小野先生と語り合う 『わたしたちの地球未来』

みなさんへのメッセージ

2年前、札幌で会ったみなさん、久しぶりです。こんにちは。小野有五です。今回の「つばさ2014冬」プログラムは、みんなで「市民科学者国際会議」に参加、福島での原発事故や放射能のことなど、みんなにとって身近な、そして大切な問題についてのお話を、さまざまな人たちからうかがう、というものです。

でも、2日間、朝から晩まで、そういう、わりあい難しいテーマの講演を聞いていると、きっと疲れてしまうでしょう。それで、23日の午後は、「ただ一方的に話をきくだけではない時間」をつくってみました。この時間は、みんなで、お茶でも飲みながら、リラックスして過ごしたいと思っています。

みかみさんからは、「わたしたちの地球未来」という大きなテーマを与えられました。でも、いきなり地球の未来について話す前に、まず、いまの自分自身について、それぞれがもっている未来の夢について、考え、少し話し合ってみたいです。

僕はことし、66歳です。2月生まれなので、高校2年生のときは16歳でした。でも50年前のことは、いまでもよく覚えています。僕にとっては、いちばん暗いときでした。こういう「みんなで話し合おう」というプログラムがいちばん苦手で、人前でしゃべるのが、そもそもいやでした。みなさんのなかにも、きっとそういう人がいるのではないかと思います。だから、まず、僕のほうから1時間半くらい、だいたい、次のようなこととお話することにしましょう。

- 1：高校2年生だったころの僕が思っていたこと、考えていたこと
- 2：それから何をしたか、どうなったかということ
- 3：北海道に来てからのこと、そして、いま、なにをやっているかということ。

できれば、パワーポイントを使って、映像などもお見せしながら、お話ししたいと思っています。だんだん、やっていることが、自分自身のことではなくて、地球未来のことになってきているからです。地球のなかで、僕の行ったところ、すてきだと思ったところ、守りたいとがんばったところ・・・をみなさんにもお見せしたいです。

そのあと、みんなでちょっと感想など書いてもらって、それをもとに、少し、話し合いができたらと思っています。

この地球は広いということ、どこに行ってもすばらしい場所があり、人がいるということ、そして、生きるということは、そういうすばらしい場所や人に会おう旅なのだ、ということを知ってもらえたら、うれしいです。



小野有五（おのゆうご）

1948年、東京都生まれ。

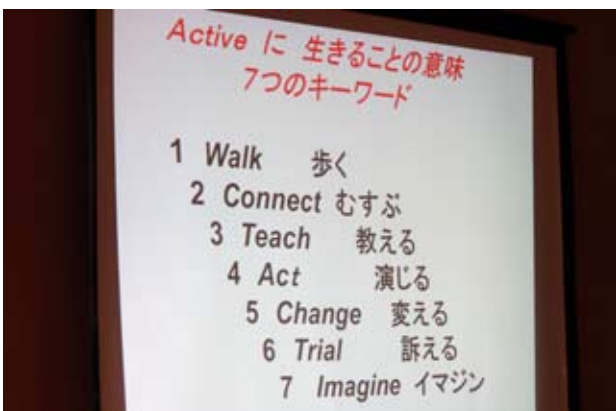
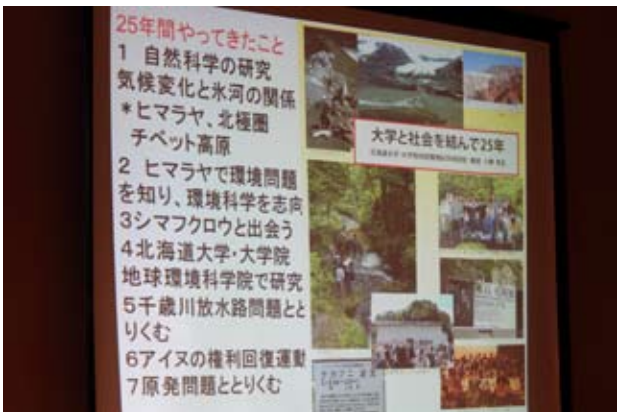
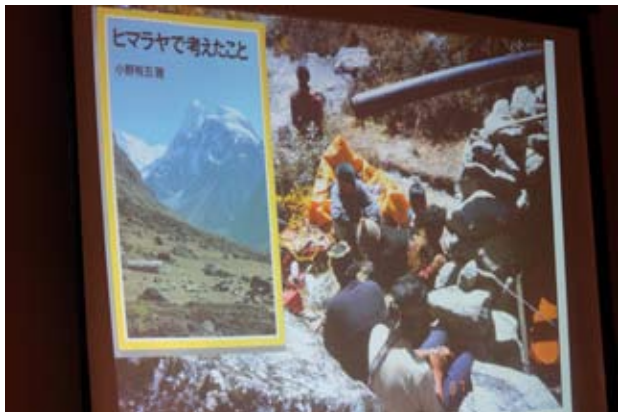
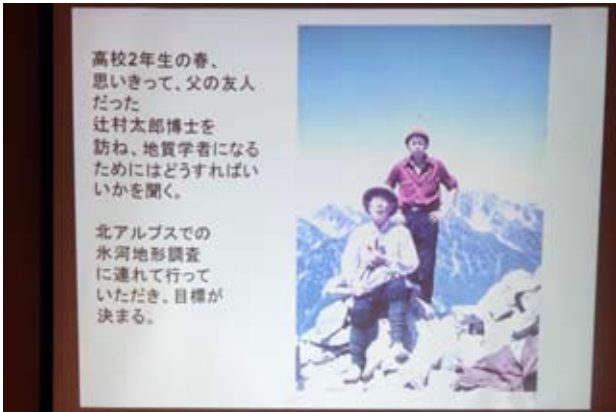
子どものときは昆虫少年、中学から化石採集、登山に熱中し、東京教育大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。

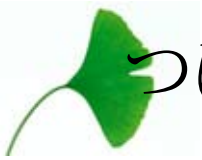
筑波大学で教え、また氷河地形の研究で、フランスの地形学研究所で1年間研修。パリ大学客員教授。1987年～2012年まで北海道大学大学院地球環境科学院で教える。北海道大学名誉教授、（現）北星学園大学教授。

3.11以後、「東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌むすびば」、「泊原発の廃炉をめざす会」を立ち上げ、共同代表をつとめる。

主著：『自然をみつける物語』（全4巻：岩波書店）で、産経児童出版文化賞、

『Active Geography たたかう地理学』で、日本地理学会賞、人文地理学会賞を受賞。ほかに、研究や環境保全活動により、日本第四紀学会賞、日本自然保護協会沼田眞賞などを受賞。





つばさ 2014 冬 in 東京に参加した感想

福島市 木戸 あかり

今回の「つばさ 2014 冬」では、仲間との再会も含め、私にとってとても有意義なものでした。普段なら参加できる機会がないような国際会議、そして今回「つばさ」のオリジナルプログラムである3人の先生方のお話、どれも貴重な体験でした。

初日、宿泊施設に着いて最初に聞いた早尾先生のお話は、先生の今に至るまでのことについて人生の先輩といった感じで聞いて、私のこれからの良い参考になりました。その後聞いた北川先生の放射線関係のお話では、原発事故があつて3年以上過ぎた今、ある面では日常生活に戻つたと感じる部分もあり、放射線に関する前に前ほど敏感になつてはいませんが、改めて放射線について考え直すことができました。正確ではない情報が出回つて紛れている中、むやみやたらに信じるのではなく、いろいろな意見や情報を収集し、自分で考え、放射線について捉えていかなければならないなと思つました。

二日目の午後は小野有五先生との語り合う機会があり、北海道のことを懐かしく思い出すと同時に、自分の未来についても考える時間となりました。映像を通じて大自然を見ながら聞いた、世界を股にかけ様々なことをしてきた小野先生のお話は、私の狭まった世界観を広げ、これから何でもできるということを教えてくれました。

国際会議では、大人たちの激しい討論を間近で見て、正直にすごいと思つました。そしてこれからは私たちの世代が福島未来について考えていかなければならないのだなと感じました。

もう一つ、今回参加して本当に良かったと思うのはやはり、2012年の夏休みと冬休み、一緒に過ごし、勉強した仲間と再会することができたことです。期末考査前という忙しい中で参加するか迷つていた今回の「つばさ」ですが、懐かしい仲間と会えて、参加して良かったと心から思つました。学校の友達とは違い、昼も夜も一緒に過ごした友達だからこそその絆があるなと感じました。今回は予定が合わなくて集まることができなかった人も多かったけれど、これからもこの絆を大事にしていきたいなと思つます。

この三日間はとても楽しく、あつという間に過ぎて

しまいました。しかし、多くのことを学ぶこともでき、充実した三日間を過ごすことができました。このような機会を設けて下さつたこと、お世話してくださつた方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

郡山市 佐々木 主浩

僕は、「つばさ」に参加していなかったら、おそらく自分の行きたかつた高校に行けていなかったと思つます。原発事故がきつかつけとなり、家族のなかで避難の話が出ていました。当時、中学校3年生だつた僕は、勉強付きの保養という内容にすぐ申し込みました。これが参加したきっかけです。家族では、良い意味で、事故のおかげだと思つています。この年に生まれていなかったら、参加できなかったからです。そして、この仲間であつたことに感謝しています。

保養は、たくさんの人々から支えられて、ボランティアの先生に教えられ、とても有意義な夏でした。勉強に加えて、他の面でもたくさんのことを学べました。

夏に出会つた仲間には、初め、最初で最後だと思つていました。今まで僕が参加したプログラムは、そのようなものが多かつたからです。しかし、みかみさんをはじめ、様々なサポートのもとに、冬、2度目の参加ができたことがとても嬉しかつたです。

思い出はたくさんあります。数が多く、なかなか思い出すことが難しいです。大勢で買い物に行つてみたり、クリスマス会やその月の誕生日の人の誕生日会、土日に行つた仁木町でのたくさんの出来事等、リラックスできた上に仲間とたくさんの交流ができました。普段ではできないことも、この「つばさ」の中ですることができました。

今は、それぞれがやりたいことを見つけ、目標が違う中、でもまた再会することができました。中学校の頃とは考え方も変わつてきていると思つます。そんな仲間とまた話し合えて、学ぶこともでき、さらに仲も深まつたと思つます。

「つばさ」は、僕たち一期に関して計5回のプログラムが行われました。どの会も、様々な人々の支え、交流によって実施されていることも学びました。そんな方々にも感謝して、これからも一層深い仲が生まれ

るように願っています。

福島市 佐藤 樹

前回、会津で会って以来、また今回、「つばさ 2014 冬」で久しぶりにみんなと東京で再会することができて、とても嬉しかったです。会津で会った時のみんなの印象とは違って大人っぽくなっていて新鮮さがあり、最初は不思議な気持ちになりました。しかし、それは最初だけで、話をしていくうちに、僕の知っているみんなだということが感じられて安心しました。みんなはとても成長していて、自分はみんなほど変わっていないなと思っていて少し気が引けていたけれど、みかみさんに「お兄さんっぽくなった」と言われて、正直とてもうれしかったです。

今回は、つばさの再会と国際会議に参加するという目的で集まって、実際に参加しましたが、僕には難しい内容に感じて、あまり交流することができませんでした。しかし、僕たち、福島市の住民のために感情を表そうになるくらいまで熱く口論して、解決に近づけようとしてくれる大人たちを見て、ありがたみを感じました。

それから、小野先生や早尾先生、北川先生、工藤さんなどの大人たちのお話をきくことができました。それは人生論のような話で、これから自分が生きていく上でとても参考になりました。今回、いろんな話を聞いて、僕は自分の好きなこと（熱中できること）に本気になろうと思いました。

つばさの集まりでは、たくさん思い出も作れるし、時間を空けて、久しぶりに再会することで、みんなそれぞれが向上しているということを確認し合えるし、大人のお話を聞くことで学ぶこともたくさんあるので、またみんなで集まりたいと改めて強く感じました。

*

みかみさん、今回またみんなと再会する機会を作っただけありがとうございます！

今、僕は大好きなギターに熱中しています。高校を卒業後、大学へ進学してサークルなどで音楽を楽しもうと考えています。何かあったらまた相談します。

郡山市 鈴木 真佐人

私は中学3年に初めてつばさに参加させていただきました。つばさは、横田さんから母へ、母から私へと誘いが来ました。私はあまり自分から話さない性格

だったので、最初は嫌だと言っていました、中学2年の時に横田さん達と北海道に行ってから心境が変わり、行くと決断しました。

つばさの人達は自分から話せる人達で、すごいなと思いました。しかし、私はあまり話せないのが不安でした。3週間になれば、3週間経てば。しかし3週間だけで仲良くなれるのか？それが私の気持ちでした。フェリーでは誰とも話せず不安になりましたが、北海道に着いてから話をかけられたので、すごく嬉しいと感じました。

つばさでは初め3週間コースと2週間コースがあり、私は3週間コースでした。つばさの人達に慣れたころ、体育館での運動ができたので運動を楽しみました。私の中学校ではあまり話さなかったため、友達はありませんでした。なので、部活もあまり行っておらず、運動能力がないので運動は好きではなかったのですが、つばさの人達と運動をすると楽しめました。

そもそもつばさは、最初、中学3年生を対象とした学習付き保養プログラムでした。つばさが終わり、受験もつばさに行った甲斐があって、福島県立岩瀬農業高等学校という高校に入れました。そして、つばさの経験を利用し、自分から話すということが出来ました。そのため、岩農では楽しい毎日を送ることが出来ました。中学校では楽しめなかった文化祭も楽しむことが出来ました。

私は元々、進学校に行くことを目指していました。なぜ農業高校なのか、それも、つばさが関係しています。つばさで酪農学園に行ったとき、北海道の農業を見て圧倒されてしまったからです。この農業を見て、僕もいつかは北海道に行って農業をやりたいと思ったからです。なので、進学校から農業高校に変更しました。

私は、3.11の地震については、恐かったこともあり、また良かったこともあります。恐かったのは、やはり、揺れの大きさにもびっくりしましたが、その後の余震、そして断水、停電、食糧確保が難しいというのが一番恐かったし不安になりました。

みなさんが思う地震は恐いだけで、良いことなんてないだろうと言う人が多いかもしれませんが、私にとって、この地震がなかったら今の自分もいないと思います。地震がなければ、つばさの人にも会っていませんでした。ということは、運動が好きになることも、内気な性格が直ることも、何よりつばさの人達に会うこともなかったのです。そう考えると、私は地震がなかったらつばさに参加することがなかったのも、そっちの方が残念になったと思います。



スタッフ

[主催]

NPO 法人 みみをすますプロジェクト

[協力]

市民科学者国際会議 (CSRP)

西崎伸子 (福島大学)

佐藤デザイン室

プリントモンキー

[協力・つばさ講師]

早尾貴紀先生 (はやお たかのり 東京経済大学准教授／社会思想史)

北川恵以子先生 (きたがわ けいこ 小児科・児童精神科医師)

小野有五先生 (おの ゆうご 北海道大学名誉教授、

北星学園大学教授／地理学、地球環境学)

[撮影]

工藤 了 (フォトグラファー)





学習支援付き保養プログラム
2014年冬つばさ(平成26年度)
活動報告書

編集・発行：特定非営利活動法人
みみをすますプロジェクト

〒060-0808

北海道札幌市北区北8条西3丁目

札幌エルプラザ2階

札幌市市民活動サポートセンター内

電話 080-4049-4622

URL <http://mimisuma-sapporo.com>

Mail info@mimisuma-sapporo.com

発行日 2015年3月31日
